

活動記録レポート：児童養護施設でのボランティア活動を通じて

一般社団法人 人間力認定協会
事務局長/理事 望月 宏彰

この度、私は静岡市葵区にございます児童養護施設「静岡ホーム」様にて、ボランティア活動に参加する機会をいただきました。今回の活動は、社会が抱える課題への理解を深め、当協会の活動理念である「人間力」の可能性を実践的に探ることを目的としたものです。本レポートでは、活動を通じて得た学びや気づきをご報告いたします。

1.職員の方との対話から見えた現状と課題

活動に先立ち、施設の職員の方と面談の機会をいただき、日頃から抱いていた疑問について率直にお話を伺いました。そこでは、児童養護施設の現状について、多くの示唆に富むお話を伺うことができました。

まず、施設に入所する子どもたちの背景についてです。入所に至る理由の約6～7割が「虐待」であり、その背景には、貧困や社会的孤立による保護者の精神的な不調が大きく影響しているとのことでした。これは個人の資質の問題に留まらず、社会全体が抱える生きづらさが、最も弱い立場にある子どもたちへと向かっている現実を浮き彫りにしています。困難な状況への対処法を見出せず、孤立を深めてしまう。まさに「人間の悩みは、すべて対人関係の悩みである」という言葉が思い出されるお話でした。

次に、子どもたちの学校生活について伺うと、「この施設に不登校の生徒は一人もいません」という、力強くも穏やかなお返事をいただきました。経済的には恵まれていても、心の問題から学校へ通えなくなる子どもが少なくない現代において、この事実は「幸せとは何か」という根源的な問いを私たちに投げかけます。物質的な豊かさや家庭環境といった一般的な尺度だけでは、人の幸福は測れない。どのような状況下であっても、信頼できる他者との繋がり、すなわち良好な人間関係こそが、人が前向きに生きていく上での土台となるのではないかと、改めて考えさせられました。

さらに、公的支援の現状と課題についても伺いました。近年、国からの補助は手厚くなり、子どもたちは安定した衣食住に加え、学習や習い事の機会も得られるようになったそうです。しかし、その一方で「里親制度」においては、補助金を主たる目的とする不適切な里親が存在し、新たな問題が生じているというお話もありました。制度を整えるだけでは解決が難しく、それを運用する人々の倫理観や人間性が問われるという、根源的な課題を痛感いたしました。

2.子どもたちとの交流を通じて

面談の後、実際に子どもたちと交流する時間をいただきました。小学1年生から中学3年生までの子どもたちと、主に屋外での遊びを通じて触れ合いました。

子どもたちは、私たちが抱きがちな「施設の子」という先入観を覆す、明るく元気な姿を見せてくれました。活発な子、少し内気な子など個性は様々ですが、そこには確かに一つのコミュニティが形成されており、他の子どもたちと何ら変わらない日常がありました。

しかしながら、一つ深く考えさせられた点がございます。それは、初対面の私に対する「人との距離感」です。例えば、幼い女の子が、特に会話を交わす前からためらいなく手をつないできたり、逆に別れ際には急にそっけない態度を見せたりと、情緒の振れ幅の大きさを感じました。職員の方のお話では、こうした行動の背景には愛情への渴望があり、人との適切な距離感を学ぶことが、子どもたちが将来社会で自立していくための重要な課題の一つであるとのことでした。そのため、施設では専門的な見地から、心のケアと並行して早期からの性教育にも力を入れているそうです。

3.総括と今後の展望

今回の活動を通じて、子どもたちを「可哀想な存在」として一括りに捉えるのではなく、一人ひとりが持つ個性や無限の可能性に目を向けることの重要性を、改めて認識いたしました。

カレーチェーン店「カレーハウス CoCo 壺番屋」の創業者も、児童養護施設の出身であると伺います。ご本人は、その経験があったからこそ現在の成功があると語られているそうです。どのような境遇も、それをどう捉え、どう乗り越えていくか。その人の持つ「人間力」が、未来を大きく左右するのです。

「幸せを感じられる心」や「困難を乗り越える力」は、生育環境に関わらず、すべての人にとって不可欠なものです。そしてその力は、適切な関わりや学び、習慣によって誰もが育んでいけると、私たちは信じております。

当協会は、今後もこうした社会の現実に向き合い、すべての人々が自らの力で輝ける社会の実現を目指し、活動を続けてまいります。

今回の貴重な機会をご提供くださいました静岡ホームの皆様、心より感謝申し上げます。